

令和 3 年度埼玉県障害者施策推進協議会  
第 1 回ワーキングチーム（A チーム）会議メモ

令和 3 年 7 月 7 日（水）10:00-12:00

埼玉県福祉部会議室

参加者：佐藤委員（リーダー）、田中委員、八木井委員、田口委員、  
大井田委員、山中委員、小材委員

他チーム参加者：なし

オブザーバー：西村氏

傍聴者：なし

**次第 1 委員自己紹介**

各委員から自己紹介を行った。

**次第 2 ワーキングチームサブリーダーの選出について**

小材委員より田中委員の推薦があり、他メンバーからも異議がなく、田中委員をサブリーダーに決定した。

**次第 3 令和 3 年度ワーキングチームの進め方について**

佐藤委員)

今後のワーキングチームの進め方について、それぞれの委員から意見をいただきたい。大柱の中の中柱について順を追って 3 回の中で確認してもよいし、ピンポイントで絞りこんでもよい。

田中委員)

1 相互理解の強化の（１）啓発・広報活動の推進と（２）福祉教育・地域交流の支援にウエイトを置いてみてはどうか。

八木井委員)

田中委員に同意する。

田口委員)

ヒューマンライブラリーにつながってくると思うので相互理解の強化に重点を置いて良いと思う。

**山中委員)**

八木井委員のヒューマンライブラリーの資料も読ませていただいたが、何を理解するかという点が大事だと思う。障害は一人一人違うため、その人の障害を全部正しく理解することはできない。社会的に何をどう理解するか。子供達がアイマスクをして歩いて不自由を感じる程度では、すごく薄っぺらいのではないか。開かれた心を作るところまでいくのが本当は良いと思う。心が動くような理解の仕方や教育を求めないとすごく上っ面で終わってしまう。

**小材委員)**

項目が3つあり、どれも全て大事なので、全体を3回に分けてもらいたい。

**佐藤委員)**

相互理解の強化にウエイトを置きながら、差別に関することや権利を守ることとを関連させながら捉えていく視点で進めていくことはどうか。

**小材委員)**

ヒューマンライブラリーを主にしながら、他の項目にも触れていく形で進めてもらえれば良い。

**佐藤委員)**

今後の進め方として、相互理解の強化を柱として捉えながら、差別解消の推進や権利擁護の取組の充実についても、関連する部分に目を向けていくこととする。

**次第4 ワーキングチームの検討課題について**

**(1) 障害者への理解促進と差別解消**

**佐藤委員)**

「I 理解を深め、権利を護る」の「1 相互理解の強化」には、(1)から(11)まで施策がある。特に(11)はもう一つの柱であるヒューマンライブラリーである。この範囲の中で各委員からの意見をお伺いしたい。

**田口委員)**

これらの施策をいかに周知するか、いかに知ってもらうかP Rの方法も大きな課題だと思う。

田中委員)

目指す到達点は共生社会だが、その中の一つ的手段としてヒューマンライブラリーや福祉教育があり、当事者による当事者の思いを色々な場面で伝えていくことだと思う。身体・精神・知的の様々な障害の特性に応じて、色々なアプローチの仕方や考え方が変わるのは当然だと思う。多様な人材をバンクして社会に送り出していく仕組みを考えるべきである。

## (2) ヒューマンライブラリー

佐藤委員)

八木井委員が実際に専門学校で体験された資料について説明をお願いしたい。

八木井委員)

～ 資料の説明 ～

佐藤委員)

事務局からヒューマンライブラリーの資料について説明願いたい。

事務局)

～ 資料の説明 ～

佐藤委員)

第6期障害者支援計画でも仮称という形でヒューマンライブラリーは記載されている。狙いとしては、福祉教育や社会教育の場で障害当事者による授業や講演等を促進するため、講師等の情報を提供する仕組みということが示されている。先ほど、皆様からも御意見があったとおり、何を目的に何を理解してもらいかなどを整理しながら進める必要がある。

また、ヒューマンライブラリーという言葉は、研究の枠組みができているものなので、様々な学会的な取組としての一つの枠組み体系がとられている。それを県の取組として、その言葉を使うと生きてしまうので、そこに賛同してこうしたことを行うということも一つであるが、私は枠組みを決められた中でやるよりは、もう少し埼玉県の実情の中から考えても良いのではないかと思います。

～ 資料の説明 ～

ヒューマンライブラリーという横文字の言葉はインパクトはあると思うが、

ここで作られた言葉ではなく、すでに世界的な取組として歩まれている、その本部・支部というような組織的な体系ができているものを、県の取組として安直に使ってしまうと誤解を生じかねないという思いがあるので、少し表現を変えることになる。

また、それに類するものを福祉教育ボランティア学習推進要請研修という形で進めており、既にあったカウエルネットという修了生達による継続的なネットワークがあり、こうした所でもノウハウを持っている。

それらのエッセンスを生かして障害者施策推進協議会のワーキングチームで施策の11を具体的にしていけることが望ましいのではないかと思います。

この埼玉県福祉教育ボランティア学習推進要請研修は評価されており、全国社会福祉協議会が新たに全国研修としてこのノウハウを取り入れて、昨年からは実施を始めている。

単に障害があることを知ってもらうことで良いのか、こういったことを理解してもらうことが必要なのか。

ここで作っていくものの本質的な部分をどうしていくのか、次回もう少し、今日の検討内容を踏まえて、考えを整理していただいた上で、どんな形で進めていくのかを検討していきたい。

#### 田中委員)

そのような方向で良いと思う。

#### 小材委員)

大阪では教育を中心にこのような取組を進めている。埼玉県で進めるのであれば、障害者協議会と教育が連携して進めた方が良いと思う。社協になってしまうと教育の人たちは「福祉だから関係ない」となってしまう。教育と上手く連携し、ヒューマンライブラリーを学校に上手く伝えながら、みんなで学ぶ機会を設けて学校の先生にも理解してもらうべきである。大阪の教育委員会では計画的に福祉教育に取り組んでいる。大阪府を参考に取組んでみれば良いものができるのではないかと思います。

#### 山中委員)

精神疾患については、小・中・高校と東大の先生たちと連携協定を締結して、教育の中に精神障害を自分のこととして、自分が罹るかもしれない病気や兆候を自分や周りがどう捉えるか、そのようなことを含めての教育が始まる。

特に学校に対して、子供たちに対しては教育と大人への啓発とは違う視点で取り組む必要がある。

**大井田委員)**

行政等の作るガイドブックや資料などを読みたいが、このままでは読めない。

点字版を作成してもらっても、点字を読める視覚障害者は1割程度しかいない。ホームページに掲載されてもPDFでは音声で読み上げができない。

色々な資料を読めるようにしてもらえると助かる。

先日、ワクチン接種に行ったときに、盲導犬を連れていたにも関わらず、車椅子を用意されそうになった。視覚障害者の誘導＝車椅子という発想に驚いた。

障害に対する理解を広げていくことも自分たち障害者の役割なのだと思うた。

**佐藤委員)**

障害者福祉推進課から教育局の方に色々な協力要請ができるのか。

**事務局)**

ヒューマンライブラリーを進めていく中で、Audienceのコアターゲットは小・中・高校の生徒であるので、教育局の協力を得ながら進めていく。また、障害者施策推進協議会にも教育局の代表として特別教育支援課も出席しているので、そこを通じて進めていきたい。

**佐藤委員)**

教育局の共助担当が大学にアプローチしてきており、地域連携の形で協力している。本流筋である特別教育支援課の部分だけでは当事者関係だけになってしまうので、学校の運営にかかってくるような学校支援で「学校応援団」のような地域の方も入ってくる。共助の方はそこをサポートしている。地域交流につなげていくような目線の教員の関わりも入れていくことが望ましい。

今回は障害からの発信で、いかに周りとの連携をとりながら意味あるものにしていくことが大事な要素になってくる。

今までの検証を踏まえながら、手段としての形をどう充実したものにするのかというのが、これからの会議の中で整理していく大切な所である。

今日のワーキングチームでは、1の相互理解の強化の中の(1)啓発・広報活動の推進の7の部分や(2)福祉教育・地域交流の支援の8から11の部分の踏まえ、11のメインとなるヒューマンライブラリー(仮称)のあり方の検討の課題をどう捉えていくのかという確認ができたところである。

次回は、今回御発言いただいた点を整理して、第2回ワーキングチームで施

策体系表の柱となっているところを検証していくことと、ヒューマンライブラリー（仮称）を具体的にどのように進めていくことが必要なのか、次回に検討していく。

## **次第5 その他**

事務局)

次回の予定だが、10月26日に第2回施策推進協議会、11月16日に第2回ワーキングAチームを予定している。